

地域の育児力を考える

港北保健所保健課

一 はじめに

私達は日頃の業務に携わる中で、地域の自然環境が変わり、核家族化が進み、生活様式の変化や近隣関係の希薄化によって、育児環境が大きく変化してきたことを感じさせられている。その内容として、

- ① 近隣とのつながりが無く、母も子も孤立している。
- ② 核家族化により、家庭の中で育児を相談する人がいない。
- ③ 核家族化により、外に遊びに出にくい。
- ④ 遊び空間が減り、外遊びの機会が少ない。
- ⑤ 兄弟の数が減少し、子供同士で遊ぶことが少

ない。

などがあげられる。

そこで地域の公的機関である保健所としては、何か地域に広く還元できる活動を実施できないだろうかと考えた。そして改めて育児力とは何かを探り、地域としてどのようにしていくことが必要か、という問題に取り組んでみた。

二 保健所における乳幼児とのかかわり方

保健所の乳幼児に対するかかわりは、出生前の母親教室に始まり、低体重児や第一子への訪問活動が行われている。次いで四カ月児、十八カ月児、三歳児の健診及び各種予防接種が、大

- 一 はじめに
- 二 保健所における乳幼児とのかかわり方
- 三 取り組みの経過
- 四 育児に関する社会資源を探る
- 五 問題の再検討
- 六 育児の実態を見るために
- 七 母の思いが出せる場づくり
- 八 取り組みのまとめ
- 九 取り組みからの学び
- 十 今後の地域活動のあり方
- 十一 終わりに

この取り組みから、母親の育児力には、「母親自身が育児する自分の姿に気付き、客観的に見ることができ」、「問題解決の糸口や方向性が見えて今後の育児に生かせる」ことが大切だと確信した。そのためには、母親が語れる場づくりと、子供を見る力を互いに学び合える仲間作りが課題である。

更に、スタッフ個々の思いや意見を納得のいく迄検討してきた経過は重要で、この取り組み自体がグループ学習の効果をも示した。

表-1 取り組みの経過

経過	内容
乳幼児業務へのおもいを出し合う	<ul style="list-style-type: none"> ・健診の体質・質 ・育児グループ <p>地域の中で育児に関するものが何かあるか</p> <p>↓</p> <p>マップから何か見えてくるのでは…</p>
地域のマップづくり	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな社会資源がある ・保健所もその一つにしかすぎない ・他にもあるだろう ・場所や形態は分かった ・母親の気持ちや母子の動き、その実態が見えてこない <p>↓</p> <p>何を知れば母の育児が見えてくるのか</p>
活動を起すための準備	<p>イメージしている母子の姿や育児力</p> <p>↓</p> <p>母のおもいを知るために訪問しよう</p>
訪問への準備	<ul style="list-style-type: none"> ・訪問の目的を分かり易く母に伝えることが大切であり、難しい ・育児の経過や困った時の解決策を一緒に考えなければ単なる調査訪問になってしまう
ロールプレイ	
マップの活用	<p>マップは、母親が知りたい情報となり、母親が問題に気付くための一つの資料である</p>
訪問の目的	<ul style="list-style-type: none"> ①育児していくうえで母親を支えているものは何かを母親と共に考える ②語るということが楽しいと思える ③母親の集まりの場への条件を知る
地区の選定	<p>理由①比較的高級住宅地が多く母子が孤立化している</p> <p>②以前に子供の集まりをした時、参加者がゼロだった</p>
訪問	<p>対象48人 転居 7人</p> <p>TEL 入れ41人→訪問 25人</p> <p>その他 { 日程都合がつかない 訪問拒否 会には参加したいetc</p>
訪問のまとめ	別資料参照 (表-4)
集まりへの準備	
目的の確認	<ul style="list-style-type: none"> ①人の話を聞きながら自分も学んでいく ②話すことが楽しいと思う。次回も参加したい
内容についての検討	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭訪問で得られた情報から、集まりへの希望をまとめ検討 ・家庭訪問の各事例の子育ての背景をよみとり集まりで予想される話題を予測した
母親の集まり	<p>参加者： S 地区 1 歳頃の児を持つ母親 11人とその子供13人</p> <p>関係者：保健婦 6人</p> <p>実施状況：母親の話し合いは1グループ</p> <p>子供の遊びは同じ部屋で専門の係が担当</p>

三——取り組みの経過

まず、始めの取り組みとして、「乳幼児との

きな柱となっている。各健診で児の発達や母子関係、生活リズム、遊びなどの経過を見て、改善が必要なものは、内科や整形外科の経過健診や地区担当保健婦による訪問指導、心理相談、療育相談などに引き継がれる。更に、集団とのかわりを持たせることが必要なのは、親子教室、地域の母親グループ、地域の療育の場へと誘導する。

かかわりの中で問題と感じている事」を各人出し合ってみた。大別すると、①健診とそのフォーロー、②仲間作りに関する事となった(表-1)。

①健診とそのフォーローについては、「母親にとって問題解決する場が少なく、不安を増大させる事もある」「母親の悩みに十分対応していないのではないかな」など、保健婦自身が抱えている悩みや問題点が浮き彫りにされた。

②仲間作りでは、「いつも集まって遊んだりしているが、児が遅れている悩みなどは仲間にも保健婦にも相談できない」「仲良しグループにはなり得ていても、児を見ることができない力

を育てるところまでいっていないのではないかな」「意図的にグループ作りのきっかけを作っても、長続きしないグループがある」など、仲間作りの機会があっても、人によりグループを必要としない場合もあるし、母親同士話す場があっても、それが必ずしも育児力を増すようには機能していないのではないかという問題が出てきた。またこれらの問題が出されていく中で、保健婦自身がこれまでの活動をふり返り、より母親の気持ちに近づく努力をすべきだとする意見が数々出された。「自分がどう育てられたか意識することが、どう子育てするかに結びついている」

図-1 港北区の地図

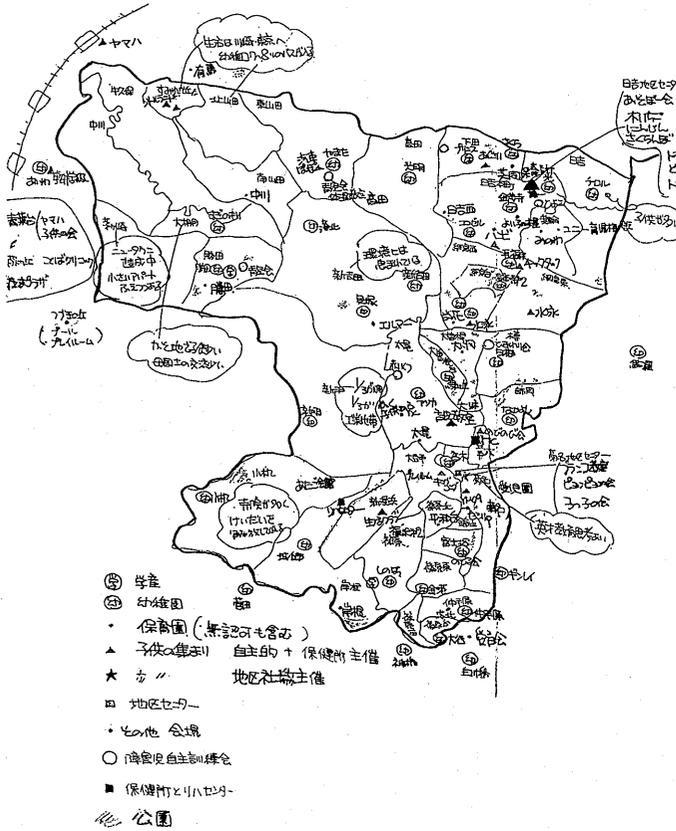
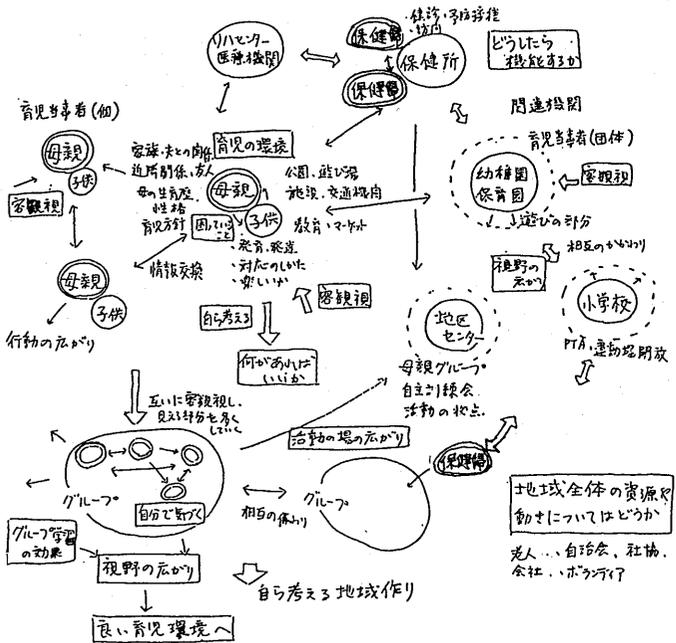


図-2 地域を考える



「子供のために考えていける場があったら良かった」など子育ての思いが出された。

四——育児に関する社会資源を探る

次に、育児環境が変化しているといわれているが、実際はどうなのだろうか、地域全体の育児に関する資源には、どのような施設や場があり、内容はどうなのか。これを知るために各地

区ごとに情報を拾い出し、一枚の地図に書きわしてみた(図-1)。保育園や幼稚園、地区センター、さまざまなグループ活動、自主訓練会など、数多くの施設や情報を一つの地域としてとらえられた。これに対する感想もさまざまで、「今まで自分の担当地区の事しかわからなかったが、全体の様子が見えた」「母親に知らせてあげたい情報があり、活用したい」「情報がたくさんあり、それをどうするか」「P T

(理学療法士)が派遣されている保育園があったり、自主訓練会の活動がわかるなど内容も深い」「これだけでは母親の気持ちが必要も深まるわけではない」などが出された。

五——問題の再検討

そこでどのような育児を目ざしているのかなど、母親の気持ちを確認する必要があるのか

今までも訪問や面接で母親と接する場はたくさんあったが、母親が自分の子をどう思い、どうしていきたくいか、必要としている部分は何かなど、具体的な母親の思いを聞くまでには至らなかった。障害児をもつ母親が離れた所に点在しており、「友達になれば訓練の事、生活上の事、医療機関の事など情報交換ができるのに」と保健婦が思っても、一歩踏みこんで、友達になりたいかと聞くとところまで母親の気持ちを確かめてはいない。さらに各施設についても、どのような対象が来ているか、実施内容や特色は何かなど把握しきれなかった。各施設の役割を一緒に私達が考え、もっと活性化させるための客観視できる場がなかった。

そこで私達は何を聞けば母親の育児が見えてくるのか検討した(図-2)。母親を取り巻く「育児に関する要素」として、母の生育歴や価値観、家族関係、児との接し方、交通機関など一つずつ掲げてみた。これらすべてを聞けば育児が見えるかというと、決してそうとは言えない。しかし、今まで漠然と考えていた、育児にかかわる要素を保健婦が共通な視点で見直す事により、今までとは違った聞き方ができるのではないだろうか。また、保健婦自身が母親の気持ちに近づきたいという思いを自覚して接すれば、個々の生活や交遊関係、子供の状況、子

供に対する気持ちや接し方がより見えてくるのではないかと考え、実際に訪問することにした。

六——育児の実態を見るために

——訪問で母の思いを知る

対象は、一歳〜一歳三カ月の児とし、区内全域ではなく篠原地区とした。地区を選ぶに当たっては、母子の問題が多いと予想される地区、すなわち①高級住宅地が多く母子が孤立しやすい。

②母親グループなど活動がさかんでない地区とした。
 実際の訪問の前に、今まで検討してきた育児に関する要素を生かし、母親の思いを引き出すには、どのような訪問が良いかを、訪問の場面を設定し、それぞれが母親役、保健婦役になり実際にやってみた(ロールプレイ)。
 私達はその中から、①訪問の目的をわかりやすく母親に伝えること、②育児の経過や、困った時にどう解決したかを母親と一緒に目でみて確

表-2 今までの子育ての中で困ったこと

62年10/28	〇〇病院で生まれる。実家で1カ月過ごす
1カ月	家へ帰ってきて困った 日中眠らない 一番大変だった ↓ 疲れたときこの家へ連れて行った ・気分転換 ・おばがめんどうみってくれる
5~6カ月	昼間公園に連れていくと機嫌が良いと機嫌悪い 家にいると同じマンションの子と砂あそびへ行く
1歳	断乳が大変だった 夜中に目を覚まし欲しがる →公園で他のお母さんに相談してうまくいった ・今までストレスがたまることにはなかった ・夫婦二人で外食したり、映画を観に行ったりはできなくなった

図-3 地区の情報をのせた地図

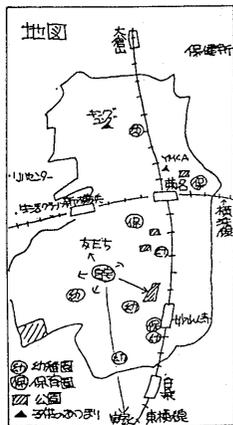


表-3 一日の生活の流れ

AM	PM
6:30 起床(母)	1:00 買い物・公園へ行く
7:15 父親出勤	4:30 帰宅
9:00 児起床	5:00 眠っている間他の母と話を少しあそび、バギーの中でねる
10:30 テレビ見る 母洗濯	6:30 児眠る 母夕食の支度
11:30 外あそび(近所の児と)	7:00 父親帰宅
12:00 昼食	9:00 入浴
	10:00 児就寝
	母自分の時間

確認できること、の大切さを確認した。また、図1-3のように地区の情報をのせた地図を利用することで、母親の知りたい情報や知っている情報がわかり、問題に気づくことができた。更に、「一日の流れ」や「これまでの経過」を母親に聞きながら表に書き入れていくことで、母親が自分の生活や育児を客観視できる媒体とした(表1-2、3)。母親役の感想としても、「こういう聞かれ方だと、自然に自分の育児がわかるし、会があったら参加したい、期待感が出てくる」など具体的なイメージがわかった。

訪問の目的としては、①母親が今までの育児で困ったことや生活を語り、自分の育児する姿がみえる。②語ることが楽しいと思える。③母親の集まりがあったら参加したいかどうか、どんな会なら参加したいか確認することにした。

対象四十八人中二十五人に訪問に行き、それぞれが訪問した状況と母親の思いを拾い出した。「ミルクを飲まない」「眠らない」「離乳食を食べない」「お風呂に入るのが大変」「自分の時間が無い」「健診で発達の遅れをいわれ、発育に不安がある」などさまざまな思いが出された。また父親の生活や相談する人、利用している公園や病院など、育児の実態も浮き彫りにされた(表1-4)。

七——母の思いが出せる場づくり ——会をもつ

訪問した母親のそれぞれの生活や思いを出していく中で、私達は、「母親自身が、自分の言葉で子育てを語ることが出来る集団の場が必要である」ことを再認識した。そこで具体的に会をもつことになり、訪問時に「会があれば参加したいか」「どんな会にしたいか」母親に聞いたことをもとに内容を検討した。

更に私達は、「話し合いの流れ」即ち会の進め方についても、①何をテーマにするか、②そのテーマにのって行くか、③その母親が語ることにより、皆の問題になっていくかなど、訪問で得た情報から会の内容や流れの予測をたてる必要性を感じた。訪問で得た情報が、話し合いの流れ(進め方)を考える上で十分生かされたことにより、私達は訪問の価値や位置づけが、改めて理解できたといえる。会の目的としては、母親が

①訪問と同じように、個々の思いが出せること。
②子供の姿を他の人の目を通して見ることができること。③楽しい、また集まりたいと思えること、に主眼が置かれた。
実際の会は、訪問した時に会への参加を希望した人が十六人で、そのうち母親十一人、子供十三人の会となった。母親だけの参加もあり、会への期待が大きいことを示した。内容について

表-5 母親のあつまり

時間	母親	子供	反応
9:30 ┆ 10:00 ┆	①親子一緒に自由あそび		
	②保健婦より 訪問の結果、この会 を開くまでの経過	・ままごと ・ボール ・積木(大) ・お絵かき	同じ室内で話し合い、 遊びのスペースをとった ・前半殆どの児が親から 離れ、あそべた
	③自己紹介 住んでいる所 自己PR	子供の興味を示した もので遊ぶ	・話し合いは、なごやかな 雰囲気が出されていた
	④参加者1人の事例 生活リズムを語る	ダンボールをだした たいたりのったりする	・共通としては“断乳” “遊び場”の話題
	⑤感想・自分の事を語る		
11:00 ┆ 11:30	⑥お茶 ・自由に話 ・保健婦より児の様子報告(カードにて) あとかたづけ		会終了後も、2~3人ずつの 母で話している姿が みられた

ても、会の目的がしっかり母親に伝わっていたことにより、意図的に流れづくりをしなくても、訪問で出されたような母親の思いが出された(表15)。また、母親が子供の様子を他の人の目を通して見られるように、一人一人の様子をカードに記入して返した。今後この会を続ける中で、母親自身が会の方向性を見い出せるような展開が期待される。

八——取り組みのまとめ

私達は、育児力とは何かに取り組み、検討を重ねるに従い、今まで確認していなかった事実を認識した。

①育児に関する機関の情報を集め、「地図」にしたところ、地域の育児に関する機関やその取り組みの一端が見え、「地域を見る視点」がもてた。

②訪問や面接、グループ学習など、実際のやりとりの中から母親の気持ちを知るために、母親を取り巻く育児にかかわる要素(人間関係や生活環境、育児への思いなど)を出して検討することが、母親の気持ちを引き出すのに必要である。

③訪問で育児の実態を見るために、事前に場面設定をして訪問時の母とのやりとりを体験した

こと(ロールプレイ)が、実際の訪問で母親の思いを聞くのに役立った。

④母親が語れる場としての集まりを持つために、訪問等で得た情報をもとに「会」の流れや内容の検討など、事前の準備が大切であることを学んだ。

⑤訪問や集まりの目的をしっかりと相手に伝える重要性を再確認した。

また、問題を検討するに当たり、今までの健診や訪問では、母親の気持ちが十分つかみきれなかったことや、保健婦個々の思いや育児のイメージが多様であることを実感したが、こうした問題を納得のいくまで検討していく過程が重要であると気づいた。

以上の結果から、母親の育児力は、
①母親が子供の成長発達を、身体面、精神面、生活面などいろいろな角度から客観的に見る事ができる。

②母親が悩みや気持ちを出せる(母親自身が自分のことを語れる)場がある。

③問題解決の糸口や方向性が見えて、今後の育児に生かせる。

などの条件によって成り立つことを確信した。そして実際の問題解決には、「母親自身が、育児する自分の姿に気づき、客観的に見ることが出来る」ように働きかける必要がある。

また、母親が自分自身を語ることでできる場づくりと、子供を見る力をお互いに学び合えるような仲間作りが、今後の課題と言える。

更に、スタッフ個々の思いや意見を納得のいくまで検討してきた経過は、非常に大切であり、この取り組み自体が、「グループ学習の効果」をも体験的に示したといえる。

地区活動をしていくには、数多くの資源をどう見て、どう読み取るかだけではなく、私達自身が知りたい情報を拾い出し、一つ一つの資源がどうしたら機能しうるのかの予測をたてる事も必要といえる。そして、母親、保健婦、各施設の人々が、共通の視点で地区をみる事ができるように再検討する必要がある。また、母親が「語れる場」づくりをきっかけに、地区として育児が育めるような活動を考え、目指していきたい。

九——取り組みからの学び

従来の取り組み方を整理して、「地区を見ていくための一連の流れ」を考えると次のようになった。

①問題意識を十分検討してテーマをしぼる(今回は育児についてだった)。

②テーマに沿って、その機能に類似した働きを

持つ社会資源を拾い出す。

③②で出された資源の設置主体が、何のためにどのような事を実施しているのかを確認する。

④更に「遊びの部分」即ち資源の予測しうる機能や、導き出せる機能を検討する（既存の組織の活用）。

⑤テーマの中心（当事者）の思いやニーズを引き出す。

⑥⑤の共通部分（問題などを取り出し共有する）を客観視し、違う部分の当事者同士の相互取り入れて、視野を広げていく方向へもっていく。

この①⑥の流れを展開するに当たり、基本的には、個々の環境を知り、視野を広げ、学習意欲を高めていく事が大切である。地区を見ていくための一連の始めから、当事者や各職種がかわる事が必要ではないかと思われる。その方法として、グループ学習は個々の視野を広げ、行動の活性化に有効であるため、地域の小ささまざまなグループ活動に取り入れていかれると良い。また、⑤の手段として、訪問や面接があるが、当事者の思いに近づくことにより、当事者自身が何を必要とし、どうしていききたいか（方向性）が分かってくるのではないだろうか。今までのように画一的に取り組む方法だけでは、変化していく状況に対応しきれない現実があった。そこで個々の問題を更に掘り下げて、

当事者と一緒に変化していく状況をとらえて、その都度対応していくやり方から、結果的に方向性を見い出せる方法論を学んだ。これは地域の育児力を考えていく上では、必要不可欠のものとして確信した。

十——今後の地域活動のあり方

今まで行われてきた多くの活動をふり返ると、実施する側のみが構想を立てて働きかけをし、成果について評価してきた。主題の中心当事者（今回は母親）の意見や思いが反映されないまま、実施する側のみが先を行こうと焦っていた。その結果、本当の地域の活動にはなっていない事が多いのではないかと考えた。即ち、地域のさまざまな資源の情報も、実施する側のためではなく、当事者やその関係機関が自ら知りたいたいと思う情報でなければ、地域の社会資源としての活用は難しい。また、活動をおこす初めの段階から、当事者や関係機関が参加していく必要がある。

今回私達が、自らの活動や思いを出し合い検討していく中で、さまざまな内省と発見があった事からも、「自らを語り気づくことが、自らを高め、方向性を見い出していくための基本である」と確信した。

また、活動を実施する側は、その活動が必ずしも対象者の本当のニーズにそぐわないのではないかと、という問題意識を常に持ち、その事実気づくべきである。更に、その活動自体を、各職種の中で再検討する必要があるのではないだろうか。

これらのことは、地域にかかわるすべての機関のさまざまな活動に当てはまると思われる。

また、地域に広く還元できる何かを見い出すための第一歩ではないだろうか。

十一——終わりに

今回の取り組みは、まだ途中の段階であるが、さまざまな職種がかかわり検討する中で、さまざまな視点を学ぶことができた。日常の忙しい業務の中では、なかなか一つのテーマを掘り下げて、検討していくことはできない。今回、地域の育児力を考える取り組みができて、継続していることは、保健所活動として評価されるべきことではないだろうか。また、今後具体的な活動をしていくためには、年単位の長期的な取り組みにより、少しずつ地域、当事者、関連機関、保健所が学び、育っていくことが大切だと思われる。

△小澤理恵、長森信行、田中香南江、長谷川レ

イ、日高かほる、兼田信子、勢登景子、丹羽喜代子、市岡美奈、百々えみ子、亀谷倫子、田邊

順子、浅野由美子、萩原千枝、井伊久美子、藤原啓子、渡辺十四子、衛生局港北保健所保健課、

福石貞子、同局港南保健所保健課、田中妙子、同局金沢保健所保健課、